

北鎌倉台峯トラスト 北鎌倉の景観を後世に伝える基金

北鎌倉だより

会報

2018年4月 NO.37



<モニタリング風景>

「谷戸の池」の堤防工事が始まります

目次

■ 谷戸の池の堤防工事と今後の課題	2	■ 鳥の名前よもやま噺 第二話 コゲラ	8
■ 「緑の洞門」問題 鎌倉市民憲章	4	■ 台峯の周辺⑮ 旧総研と梶原山住宅地	10
■ 台峯を歩く会と関連活動の報告	6	■ 「会員の集い」、活動記録など	11
■ 早春の 台峯の動植物	7	■ 整備工事により変わる風景(2)	12

.....

谷戸の池の堤防工事と今後の課題

.....

●2018年春 台峯の現状

現在、池のへドロのしゅんせつ工事が終わり(2017年6月終了)、堤防の改修工事が始まろうとしています。危険はありませんが、立ち入り禁止のままなので、基金の「歩く会」も谷戸の池の周辺を歩けない状況が続いています。幸い、これまでの工事で湿地への影響は出ていないようです。

●堤防工事の遅れと今後

2017年度に予定されていた堤防工事ですが、業者が決まったのが2018年3月で、すでに年度末でした。着工が2018年の4月になりますので、工事は8月末までは続く見込みです。前回、へドロのしゅんせつ工事をしてくれた、同じ業者の同じ担当者が工事を請け負ってくれることになりました。

今後、管理棟の工事が2箇所、2年かけて建設される予定なので、2021年の春頃に開園になると思われます。

●堤防工事の概要

これまでもお伝えいたしました、基金の交渉の成果もあって、大規模な改修を避ける工事となります。コンクリートを使うのは水門が設置される一部分で、ほとんどが現在の土の堤防を固めて補修します。石や芝生で覆うことは取りやめ、現在の堤防の土を固めて改修します。全体に池の水位が低くなりますが、水抜き管理や水位の調節が可能になります。工事の際、水路の汚染対策への配慮を、引き続き行政や現場の業者と話し合っています。

●谷戸の池の安全対策が難問

転落防止のために、新たに柵が設けられる予定です。景観が変わってしまいますが、今後の安全対策のためにはやむを得ないでしょう。池を常時監視できる方法がないので、安全対策の面から、台峯緑地の管理体制をどうするか難しい問題です。

●工事用の仮設路と散策路の計画が二転三転

谷底の北半分(山崎小学校裏のオギ原の周辺)の工事用仮設路はそのまま残され、土砂崩れなど緊急時のみ(普段は閉鎖)使用される車両侵入路となります。

谷底の南半分(谷戸の池と湿地の周辺)の工事用仮設路(既存の散策路の上にシートと砂利を敷いた道)は撤去され、その後幅員を狭くして自然に配慮した散策路(既存の散策路を整備)が設けられます。

谷底の北半分の散策路は既存の散策路をほとんど現状のまま活かすことになりました。

結論は以上の通りですが、この一年、計画が二転三転して、私ども基金も対応に追われました。今後は、散策路の整備内容について検討してまいります。

●中央公園との連絡路、谷底と尾根の連絡路はどうなる

台峯は西側の「鎌倉中央公園」と一体の緑地のため、相互の緑地を往来できる散策路が予定されていきました。また、谷底と尾根の連絡路(基本計画では「主動線」と称され、緑地のメインルートの位置づけ)も計画されていますが、これらが廃止になる可能性が出てきました。

これにより、今後の緑地管理はもちろん、

生物の保全が難しくなるかもしれません。また多数の来園者が、谷戸の池周辺(生物保護を優先した「保全ゾーン」の位置づけ)を日常的に利用すると予想され、自然への配慮が心配されます。

●里山的な整備が廃止

これまでの話し合いを基に、基本計画や実施設計では、田んぼの復活や水路の補修、畑跡地の復元が予定されていましたが、予算不足を理由にこれらの計画が廃止されてしまいました。基本構想の理念であった、里山的な管理は、開園後のボランティアの手にゆだねられることとなります。

しかし、園路沿いの倒れかかった樹木、

水路などの日照をさまたげる大きな木の伐採は危険を伴います。開園以前に専門業者に依頼する必要があるため、これからも市に要請してまいります。

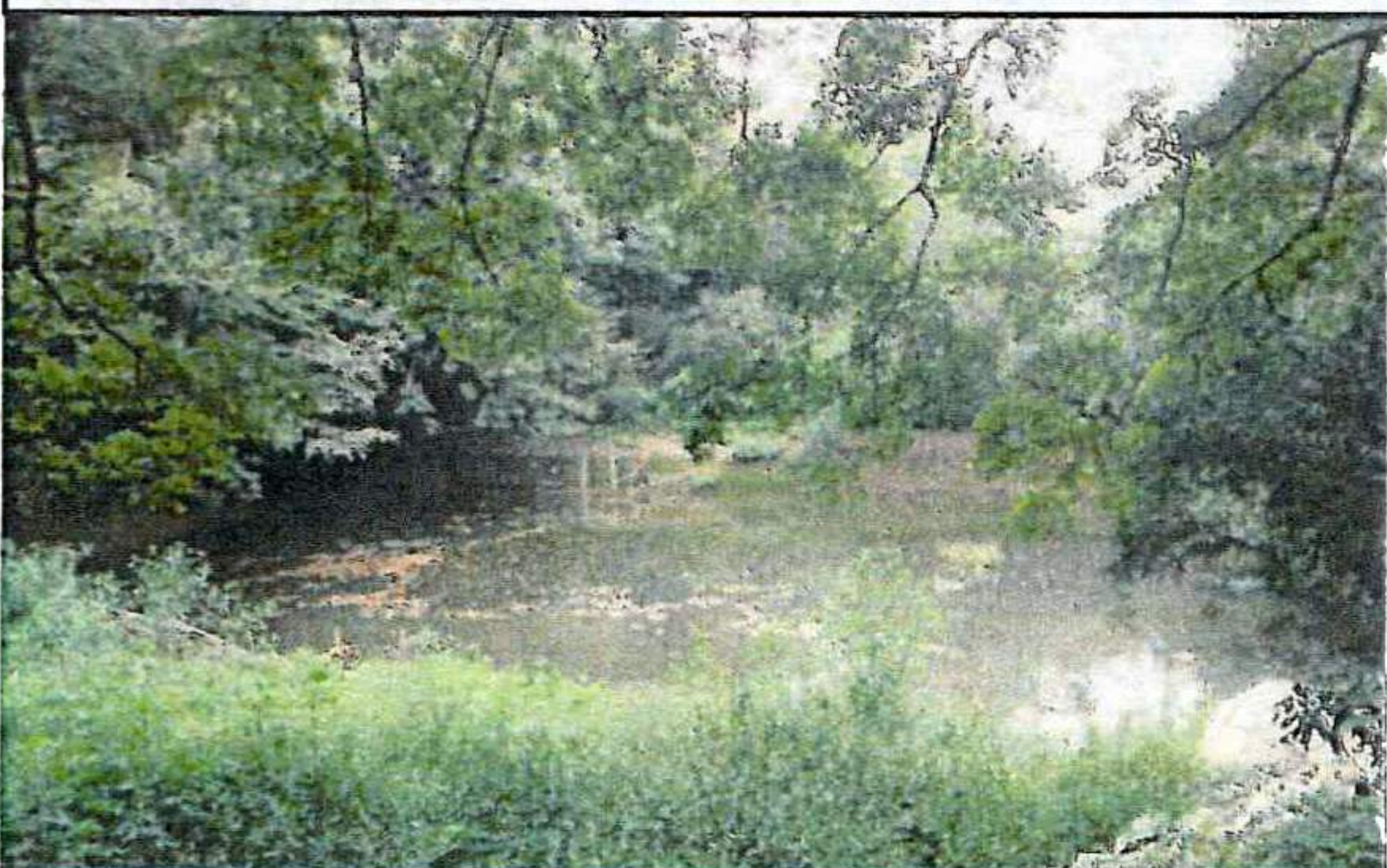
●周辺緑地の買収はできるのか

台峯緑地の東側斜面は住宅地に隣接していることから、「保全配慮地区」として、後から買収を進めることになっています。ミニ開発の恐れもあるので、速やかな買収を進めて欲しいところですが、鎌倉市の財政事情から難航しそうな気配です。周辺緑地の買収の進行に関しても、市公園課と定期的に会合の場を持ち、確認してまいります。

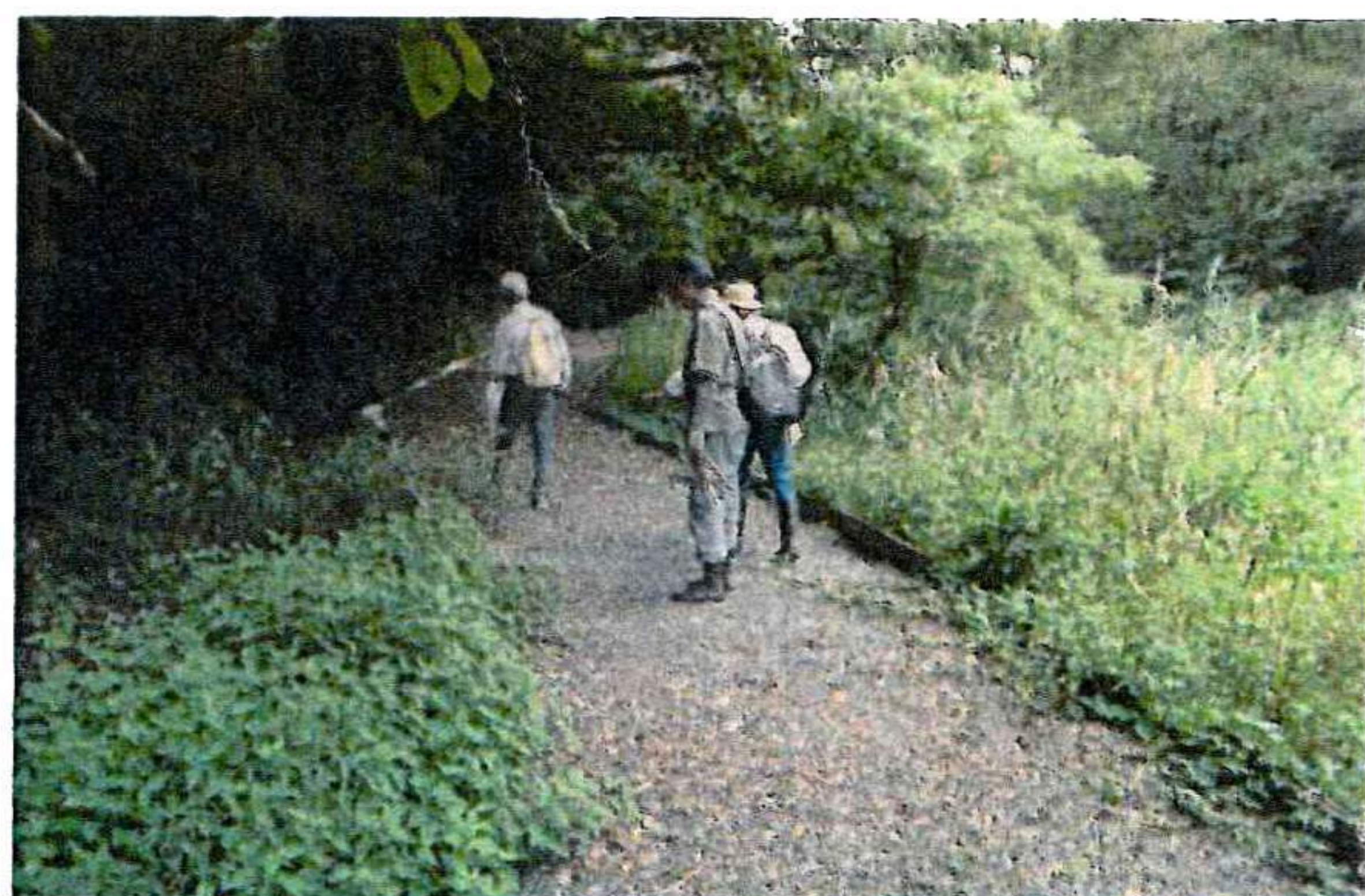
久保 廣晃



改修される堤防の落ち口 水抜きできる排水管と水門が設置される



へドロが除去された「谷戸の池」



堤防工事の後、撤去される台峯南側(「谷戸の池」付近)の工事用仮設路。道幅を狭くし、自然と調和した散策路として作り直される



緊急用の車両侵入路として残される、台峯北側の工事用仮設路

「鎌倉市民憲章」—1973年11月3日制定のこの憲章は、「鎌倉の歴史的遺産と自然及び生活環境を後世に伝えます」と高らかに謳い上げており、それこそが私達市民協働の精神であると言えます。

会員の皆さまもご高覧の事と拝察致しますが、3月1日付「広報かまくら」第1311号に、「北鎌倉隧道の安全対策について」と題した松尾市長の言葉が掲載されました。

「緑の洞門」について、市長は当初の開削方針を転換、平成28年安全性確保と尾根の文化財的価値との両立に向けて仮設トンネルを整備する計画を発表、昨年中には整備完了し通行可となっている筈でした。

しかし、市民に対してまずなすべき遅延

理由の説明も無く、地権者である円覚寺及び雲頂庵に対してのおわび文の形をとっています。今回の市長声明文は市民を後に回し、権利関係だけ重視した証と見て取れます。(この北鎌倉駅脇の洞門開削問題について、詳細は「緑の洞門Q&A」ご参照 <http://kitakamashiseki.blog.fc2.com/blog-entry-237.html>)

さて、台峯供用まで残す約3か年、この「緑の洞門問題」と併せ、長年皆様とともに推進してきた台峯保全活動(基本構想から実施設計まで)が最終段階で逸脱(設計変更など)することがないように注意しつつ、市側と協力を進めて行きたいと思っています。

「台峯を歩く会」も今月で233回となりました。当基金の活動指針の中に鎌倉市民憲章の理念を守りつつ、後世への想いを馳せてー。

平成30年3月

理事長 出口 克浩

北鎌倉隧道の安全対策について

「R北鎌倉駅ホーム北側にある北鎌倉隧道は、経年劣化が著しく、通行の安全性が確保できないことから、平成27年4月から通行止めとし、これまで安全対策の検討を重ねてまいりました。平成27年に開削を行う方針を決めました。が、鎌倉市文化財専門委員会において「北鎌倉隧道の尾根は文化財的価値を有する場所であり、国指定史跡の指定を図っていくべき」との考えが示されたことから、平成28年には安全性の確保と尾根の文化財的価値の保全を両立する工法を検討することに方針転換し、これに伴い、仮設トンネルを整備する計画を発表しました。

仮設トンネルの整備には、地権者である円覚寺様および隣地のご承諾を得ることが必要となりますが、少しでも早く隧道の通行を可能にしたいとの思いから、承諾を得ることなく、私の判断で方針発表を先行してしまいました。

このため、地権者および関係者の方々が誤解を受けるなど、多大なるご迷惑をお掛けしてしまいました。深くおわび申し上げます。

今後は、地権者および議会など、関係者の方々との十分な協議を行い、一日でも早く通行が再開できるよう取り組んでまいります。

鎌倉市長 松尾 崇

これで
わかった!

緑の洞門 Q&A

そうだったのか

Q1：緑の洞門(北鎌倉隧道)にはどのような価値があるのですか。

A：文化庁のみならず鎌倉市文化財専門委員会や多くの考古学、歴史学の専門家は、洞門とそれを覆う尾根には文化財的価値があると認めています。この尾根は室町時代の「円覚寺境内絵図」(国の重要文化財)にも描かれている結界であって、現在に至るまでその姿をとどめてきました。円覚寺にとっても秩序と聖性を維持するための大切な境界です。



トンネル(隧道)は昭和の初めに掘られたと推測されていますが、地元の人たちと鎌倉を訪れる人たちから北鎌倉らしさのシンボル、なじみの景観として愛されています。また、専門家からは「文化的景観」としての価値を指摘されています。

文化庁からは、ここは国指定史跡に指定されるべき価値があり、追加指定に努力することを促されています。

Q2：この尾根は横須賀線開業により断ち切られたので価値がないという説明を聞いたことがあります。

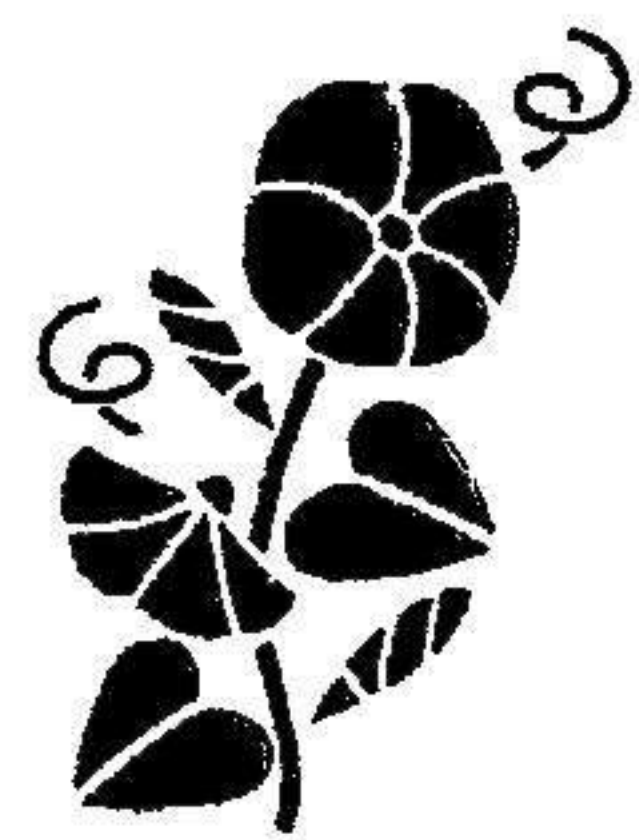


A：以前はそのように考える専門家も居ましたが、2016年に鶴見大学の伊藤正義教授が「尾根を構成する岩塊は削られていなかった」ことを科学的に立証しました。

Q3：以前、市が「大きな地震などで尾根ごと崩壊が起り得る」との説明を町内に回覧したために、多くの住民はそう思いこまされていたと思いますが。

A：専門家の検討により、その説に科学的な根拠がないことが明らかになり、そのような可能性は既に否定されています。

トンネル自体が直ぐに大きく崩れるようなことはありませんが、将来的には表面の剥離などは起り得るので、トンネルの外側の斜面や坑口付近についてはなるべく早く、適正な補強などの対策が必要とされています。



「北鎌倉緑の洞門を守る会」のブログより、「緑の洞門 Q&A」の冒頭部分を転載しました。続きは次を御覧ください。

<http://kitakamashiseki.blog.fc2.com/blog-entry-237.html>

台峯を歩く会と関連活動の報告

2017年3月より2018年2月までの「台峯を歩く会」と関連活動の報告を致します。

何と本年2月で232回を数えました。しかしながら昨年2月から現在に至るまで、谷戸底への通行は禁止と成っています。「谷戸の池の浚渫工事」「仮設路関連工事」「堤体改修工事」等が今後も予定されています。

しばらくは工事の進捗状態に一喜一憂しながら、チェックを続けていきます。

・3/19 2月の山歩きの時は、「春」を見つけるのがやっとでしたが、今回は配水池横のオオシマザクラが満開、その速さに驚かされます。

・4/16 立ち入り禁止が5月末まで延期。今回は「春総集編」野草と樹木の花等、全てを見る事が出来ました。シュレーゲルアオガエルが鳴き、カワニナも、オタマジャクシも元気に泳いでいました。

・5/21 「みどりショップ記念」の山歩き。今回の自然観察のテーマは、初夏の樹木の白い花です。チガヤ、カモジグサ等イネ科の入門も実施。

・6/18 浚渫工事の現状について説明。今回のテーマは、梅雨時に多いチョウ。ホタル観察会も始まります。

・7/16 ホタル観察会報告。仮設路工事の影響がどう出るか大変心配しましたが、

6/11 ゲンジ 150、7/8 へイケ 120 と元気でした。問題は来年？

・8/20 テーマは樹液に来る虫たち。刈らずに残したい草の花。

・9/17 台風18号接近のため中止。

・10/15 9/18に行われたマツムシを聴く会報告。聞き分けるのが大変なマツムシ。今年のはっきり、大きな声を全員が確認、大成功。

・11/19 テーマは目立つ木の実、小さな木の実、そして草の実。市役所とのミーティングで突然出てきた今までの合意事項を根底から覆すような暴論に対し、激しい反対論噴出。

・12/17 今回のテーマは、12月に残っている紅葉。地味な枯れ木になった落葉樹の実。ムラサキシキブ、ビナンカヅラ、イヌシデ、ヌルデ。役所案に対する当基金の基本的な考え方の説明。(参加者全員賛成)

・1/21 恒例の台稻荷初詣。今回のテーマは「エノキの枯葉をめぐってチョウの幼虫を探す」12月25日市役所との交渉を評価しつつも、緊張感をもって交渉に当たるよう、激励の意見多数出る。

・2/18 1年ぶりに谷戸底の部分を含め、モニタリングを実施。その変化に驚かされると同時に「自然を守ることがいかに大切か」を痛感させられました。

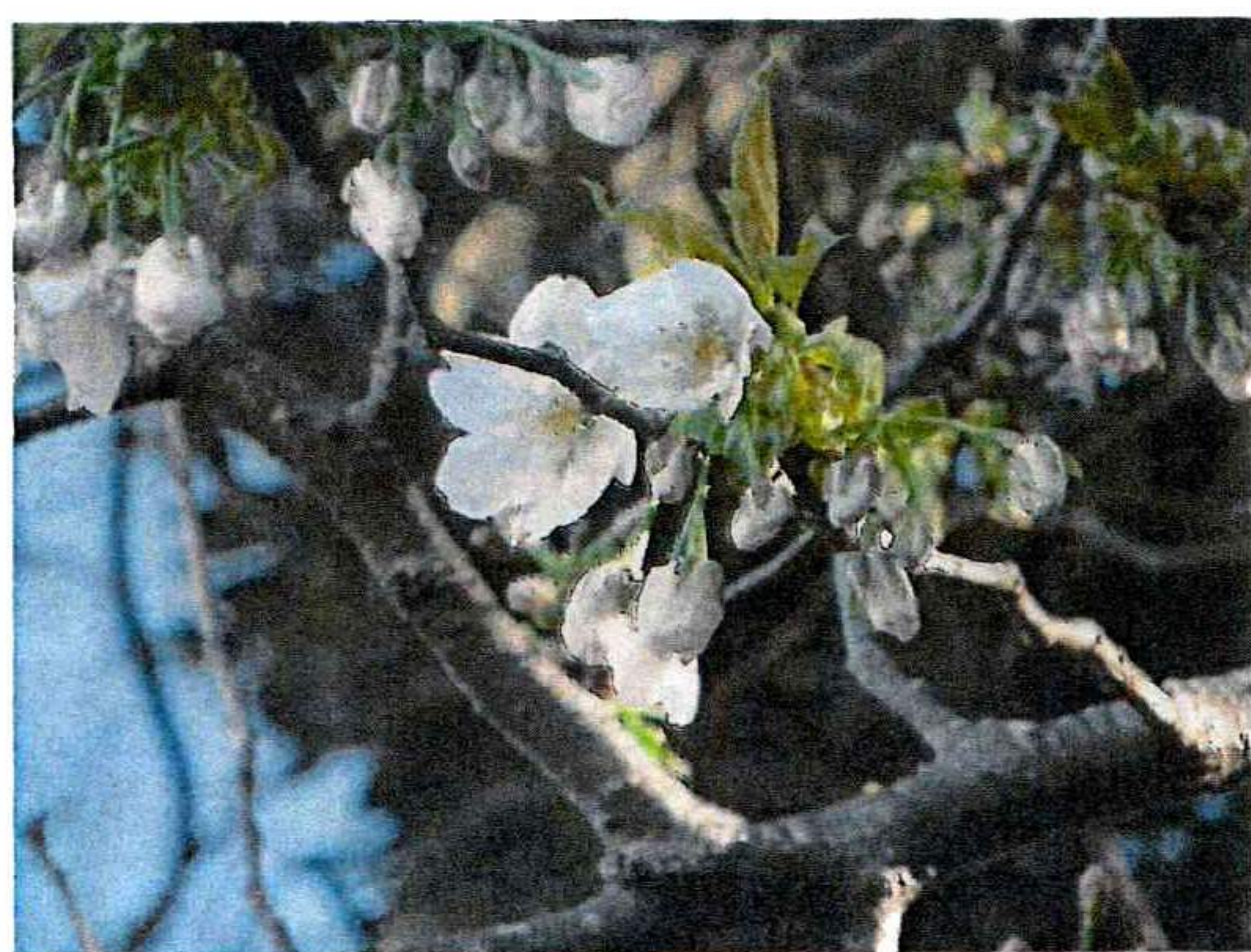
望月 晶夫



<台峯で一番早く開花するというオオシマザクラ>



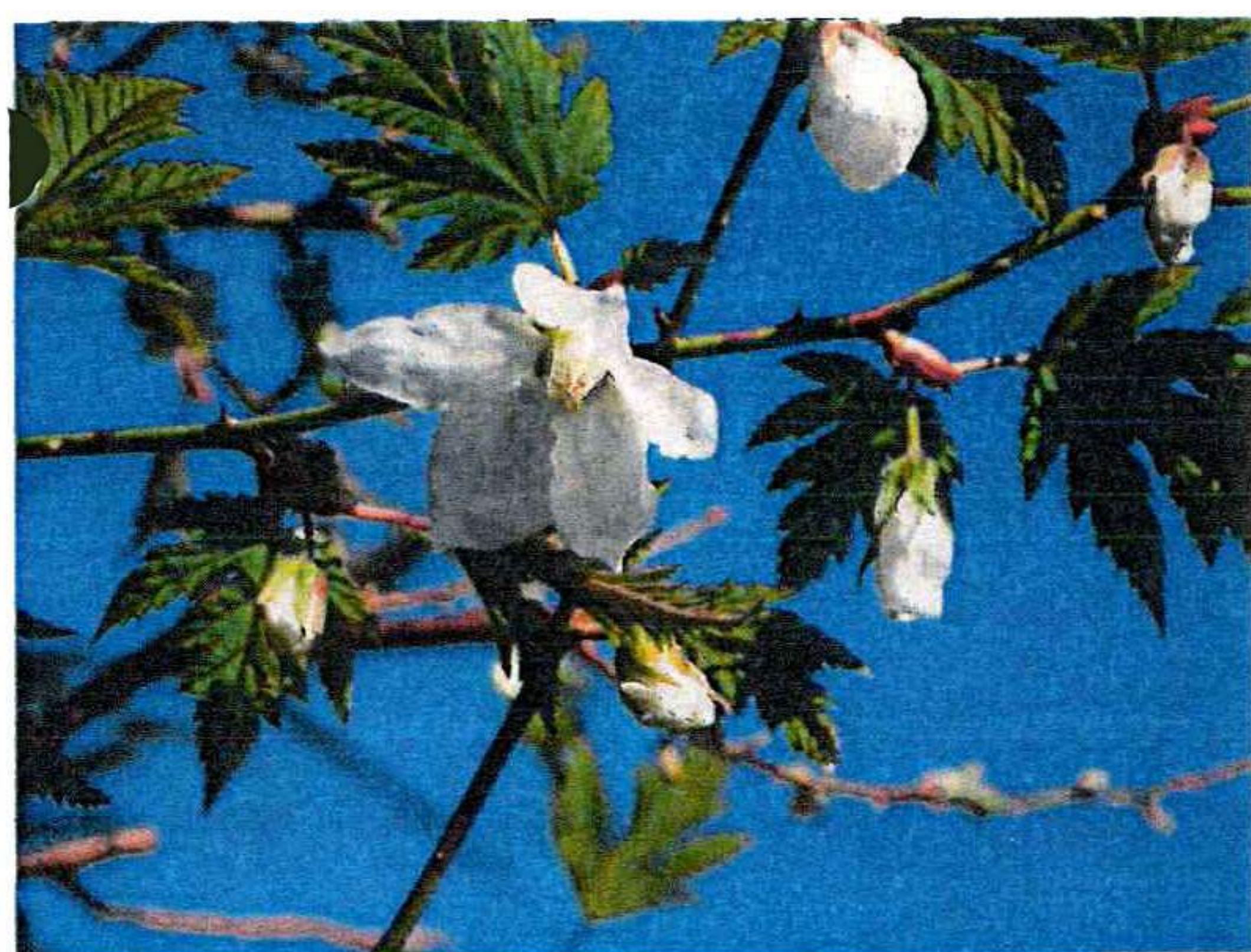
<カンアオイ>



<同上 花部分>



<ヒキガエルの卵>



<カジイチゴ>



<スミレ>

前回は名前を知るとその対象に愛着が生まれること、学名と標準和名、俗称の話を *Milvus migrans*、トビ、とんびの例で、ごく簡単に述べました。

昭和天皇の侍従が「お上は名もない草にも御心を寄せられる」と申し上げると、「もし名もない草を見つけたら、それは新種の発見で大変な事です。名を知らぬ草と云うべきです」と仰せられたということです。1758年、スウェーデンの学者リンネウス(リンネと同じ人です)が確立した命名方法によって、全ての生物に国際的に共通な名前、即ち学名が付けられるようになり、以後、年月を重ね、現在では全ての生物に学名がついています。そして日本では学名に対応する標準和名が付けられています。ですから、陛下の仰る通り、名もない草とは新種の発見以外はありません。



今回は鎌倉の山野を歩くと、何時でも見られる世界で最も小さい啄木鳥(きつつき)、コゲラを例に、学名を見てみましょう。

普通、図鑑などでコゲラの学名は *Dendrocopos kizuki* と記されています。これは略式で、正式には *Dendrocopos kizuki* (Temminck, 1835) と命名者と、名前を決めた年号を書くこととなっています。 *Dendrocopos* が属名で、次の *kizuki* が種名です。属名の次に種名を書く『二名法』で、日本人の姓名の表記と似ています。読み方は文部省式のローマ字の様にデンドロコポスキズキと読みます。学名が作られた時1758年頃の国際言語はラテン語でしたので、学名はラテン語を使用しています。ラテン語はその当時でも死語ですから、実際にシーザーやアントニオがどの様に発音していたか、誰も判らないはずですが、しかし現在までも昔の通り唱え続けられていると思われるカソリックの祈禱文の発声から、当時の発音を類推し正式の発音がきめられています。長音とアクセントがありますが、難しく考えず、日本人は文部省式のローマ字と同じように読んで大丈夫です。命名者と年号が()の中にあるのは後から属名が変更された場合です。命名後、分類学が進むにつれて、属名が変わったことを表しています。最近ではDNAによる分類体系の見直しが進行中で、従来の分類方法が根本から大きく変更されつつあります。そこで分類の話や命名史についてここでは触れません。

Dendrocopos アカゲラ属は古代ギリシャ語で *dendron* (木) と同じく古代ギリシャ語 *kopos* (敲く) からきています。学名を最初に決めようとしたとき、多くの学者が自国の名前を学名にしようとする主張したので、一番古い名前を学名にしよう決めました。そこでギリシャ時代の「アリストテレスの動物誌」やロー

マ時代の「プリニウスの博物誌」から引用した名前が多くなったので、学名には古代ギリシャ語とラテン語が多く使われています。しかしコゲラの種名 *kizuki* は日本語の「きつつき」から来ています。次の Temminck, 1835 はテミンクが 1835 年に命名したと云う意味です。学名を見るだけで、少し日本の博物史を知っている人なら、コゲラはシーボルトがヨーロッパに初めてサンプルを送って報告した鳥で、それを受け取ったテミンクが命名したと判ります。鎖国中の日本に潜入し日本の博物をヨーロッパに紹介したケンペル、ツンベルグ、シーボルト、そして本国の研究所で送られた標本を分類研究したテミンク、シュレーゲルなどの名前を、もし御存知なければ、ネットで調べるなり、台峰を歩きながらでも、私に尋ねてください。コゲラは英名で Japanese Pygmy Woodpecker といいますが、学名や英名からコゲラが日本特産の鳥であることが判ります。ユーラシア大陸から離れた日本列島で隔離分布した啄木鳥です。英名で Japanese とついでいれば大抵、日本若しくはその周辺しか見られない日本独自の鳥です。

コゲラは僅か 30 年ほど前には、鎌倉の山野で滅多に見られない鳥でした。私が鳥を見始めたころ、高尾山の探鳥会で「やっとコゲラが見られた」と、感激したのを今でも覚えていています。現在の台峰ではそのコゲラが至極容易に見られます。これは鎌倉の緑地が放置された森林となり、コゲラにとって好都合な枯木が豊富になった結果です。鎌倉では里山の環境が無くなり、今の鎌倉の山林は頼朝が幕府を開いた時代などより、はるかに遠い遠い昔に戻りつつある様です。

久保 順三

コゲラ (小啄木鳥、学名: *Dendrocopos kizuki* あるいは *Picoides kizuki*) はキツツキ目キツツキ科に分類される鳥類の一種。英名は "Japanese Pygmy Woodpecker" で、日本にいる小さなキツツキの意。

形態[編集]

全長 15 cm^{[4][5]}(13-15 cm^{[6][7]}) で、スズメと同じくらいの大きさ。翼開長は約 27 cm^[5]。体重 18-26 g^[6]。日本に生息するキツツキとしては最も小さい。オスよりメスがやや大きい。灰褐色と白のまだら模様の羽色をしている。南方に分布するものほど体色が濃くなる傾向がある。雌雄の羽色の違いは後頭部にある赤い斑の有無(雄にある)程度だが、野外ではほとんど見えないため、羽色で雌雄を区別することは困難なことも多い。足には前指 2 本と後指 2 本がある^[8]。

分布[編集]

ロシア南東部、サハリン、朝鮮半島北部、中国東北部、日本列島など、東アジアの限られた地域に分布している。

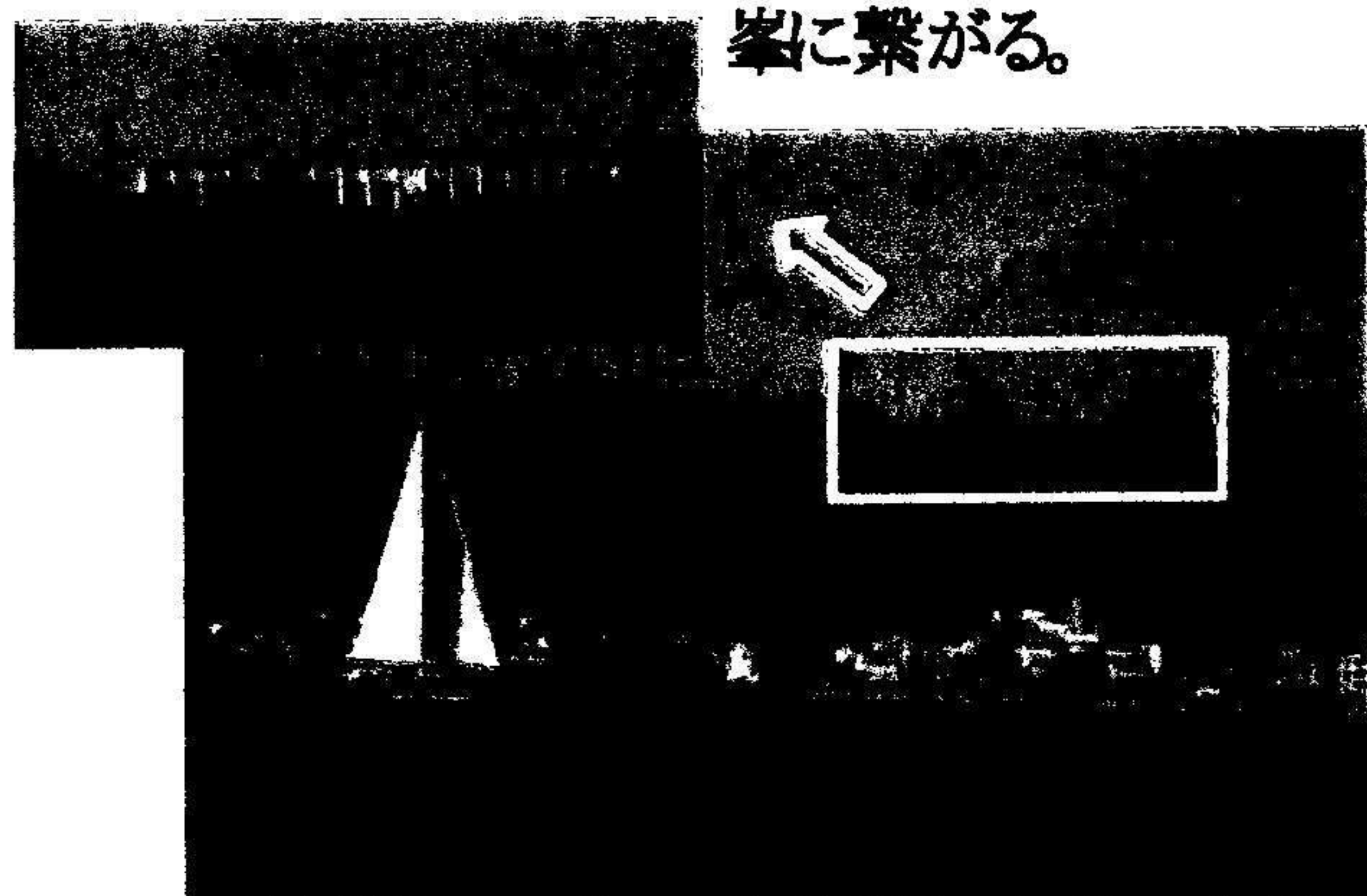
日本では一部離島を除く全国の亜寒(亜高山)帯針葉樹林から亜熱帯照葉樹林まで広く分布する。基本的には留鳥だが、寒冷地に生息する個体は、冬季には暖地へ移動するものもいる。東京都小平市の「市の鳥」に指定されている。

—Wikipediaより 写真も

.....
台峯の周辺⑮ 旧総研と梶原山住宅地
.....

台峯からは海が見えないようだが、休日にヨットで沖に出ると、いつも、つい台峯を探してしまう。緑の稜線が続く中で唯一目星とするのが、旧野村総合研究所の建物である。海からは常盤山緑地の奥にあり、同じ野村系の梶原山住宅地の谷戸を挟んで台

峯に繋がる。



<葉山沖から>

1966年の完成から数年後に初めて筆者がこの建物を訪問したのは、学園祭での発表用に資料を貰うためだった。対応してくれた情報室長は、我々が偶々学校の後輩に当たったこともあり、向いの住宅地にあるご自宅でお茶に招いて下さった。

この住宅地には研究所関係者が多く住んだようで、普段は都心に通勤する当時の佐伯喜一理事長も、深夜の帰宅途中自宅間際の車から窓の灯りを見て現れ、残業中の研究員を激励したと伝わる。今も関係者が住んでおられるのかもしれぬ。

さて次に訪問したのは翌年冷やかし半分の就職説明会で、全国から優秀そうな学生が集まり鋭い質疑応答が続いたのだが、筆者が一番感銘を覚えたのは交通費として千

円くれたことで、これが遥々北海道からも徒歩で山越えしただけの筆者も一律同金額だったのだ。尤も何でも上がっているもので、会場には住宅地に住む知人が谷戸から上がっただけの、山も越えずに来ており、「何だ、君は今日が初めてか？」どうやら彼は毎日やってきては交通費をせしめていたらしい。

それはともかく、研究所の設立に当っては各国のシンクタンクを参考に、中でも米国スタンフォード研究所を範としたようだ。理系を含む調査・研究が中心の業務は勿論そのための立地も同様に郊外とした結果、鎌倉が選ばれたのだろう。万博の入場者数予測での成功や当時皇太子の今上天皇のご訪問などがあつたのも、この時代である。

やがて業務の中心が、公共から民間向けに、調査・研究からコンサルティングやITソリューションにシフト。また生物科学研究からの撤退など変容する中で、1990年頃に鎌倉から完全撤収した。

その後土地建物が市に寄贈されてからも既に十数年たつが、跡の利用が未だ定まらぬ。ITセンターとかゴミ焼却場とか。しかし、筆者としては、開発目的が失われた以上、建物を無くし、自然が戻るように願う。台峯と常盤山の両緑地が近づく訳だし、間にある住宅地にとっても良いことだろう。海から眺める際に台峯の目印は無くなってしまいが。

本田隆史



<開発敷地風景 『野村総合研究所 10年史』より>

第19回「会員の集い」



11月23日(木、祭)山ノ内公会堂に計30名ほどの方にご出席いただき、今年も「会員の集い」が開かれました。

台峯の整備が着工しつつあるところで、現状をご説明しつつ、みなさまのご意見を伺った次第です。

当日の次第は以下のとおりです。

1 理事長あいさつ

2 活動報告

・山歩き、山の手入れ、モニタリングほか

3 台峯整備の計画変更と今後

4「台峯は生きている」(台峯の四季)

・久保、望月両理事の対談、スライドショー

(上掲写真)

活動記録

(2017年9月10日～2018年3月)

- | | |
|---------------|---|
| 1 市公園課と打ち合わせ | 10/4,11/10,12/25,1/25, |
| 2 会員の集い | 11/23 |
| 3 理事会 | 10/1,11/5,12/3,1/7,2/4,3/4 |
| 4 台峯を歩く会(山歩き) | (P.6 参照) |
| | 10/15,11/19,12/17,1/21,2/18,3/18 |
| 5 山の手入れ | 12/16,1/20,2/17,3/17 |
| 6 モニタリング | |
| | 9/16,10/1,11/5,12/16,1/20,2/4,2/17,3/4,3/17 |

- | | |
|-------------------|------|
| 7 北鎌倉女子学園生徒を台峯に案内 | 3/16 |
| 8 マツムシを聴く会 | 9/18 |

(なお、前号で「ホタル観察会」を「6/4,7/8」としましたが、「6/11,7/8」の誤りでした。訂正します。)

編集後記

10 数年ほど前のことだが、何か健康的なことを、と偶数週末は若いころ少し齧ったヨットの、奇数週末は当基金の、仲間に加えて頂いた。

ところが、海では早朝に出帆するや否や呑み始めるし、また山では手入れ後の一杯が堪らぬ。結果、健康的どころか、大伴家持の歌のようになった。

海行かば 水漬く 水割り

山行かば 草生す メタクサ*

オー・ドウ・ヴィ*のヘネシー*など舐め

カミュ*も忘れじ

* : ブランデーの銘柄名

* : eau de vie 「命の水」 仏語でブランデーのこと

正会員の皆さまへ 総会の予告

正式かつ詳細なご案内は、間近になってから別途お送りしますが、総会開催は来る5月27日(日)10時から、山ノ内公会堂にて、の予定です。ぜひお越しください。

会報37号

発行日	2018年4月30日
発行者	特定非営利活動法人 北鎌倉の景観を後世に伝える基金
事務局	〒248-0011 鎌倉市扇ガ谷3-2-12 本田方
HP	www.kitakamakura-daimine-trust.org
写真	小谷一夫・久保廣晃・本田隆史

整備工事により変わる風景（2）

「谷戸の池」堤防工事により変わる風景があります。35号に続き、現在の姿をまとめました。



＜堤体遠望。3本立ちの「谷戸三郎」は残るが、その奥左のハンノキは幅広となる堤に掛かってしまう＞



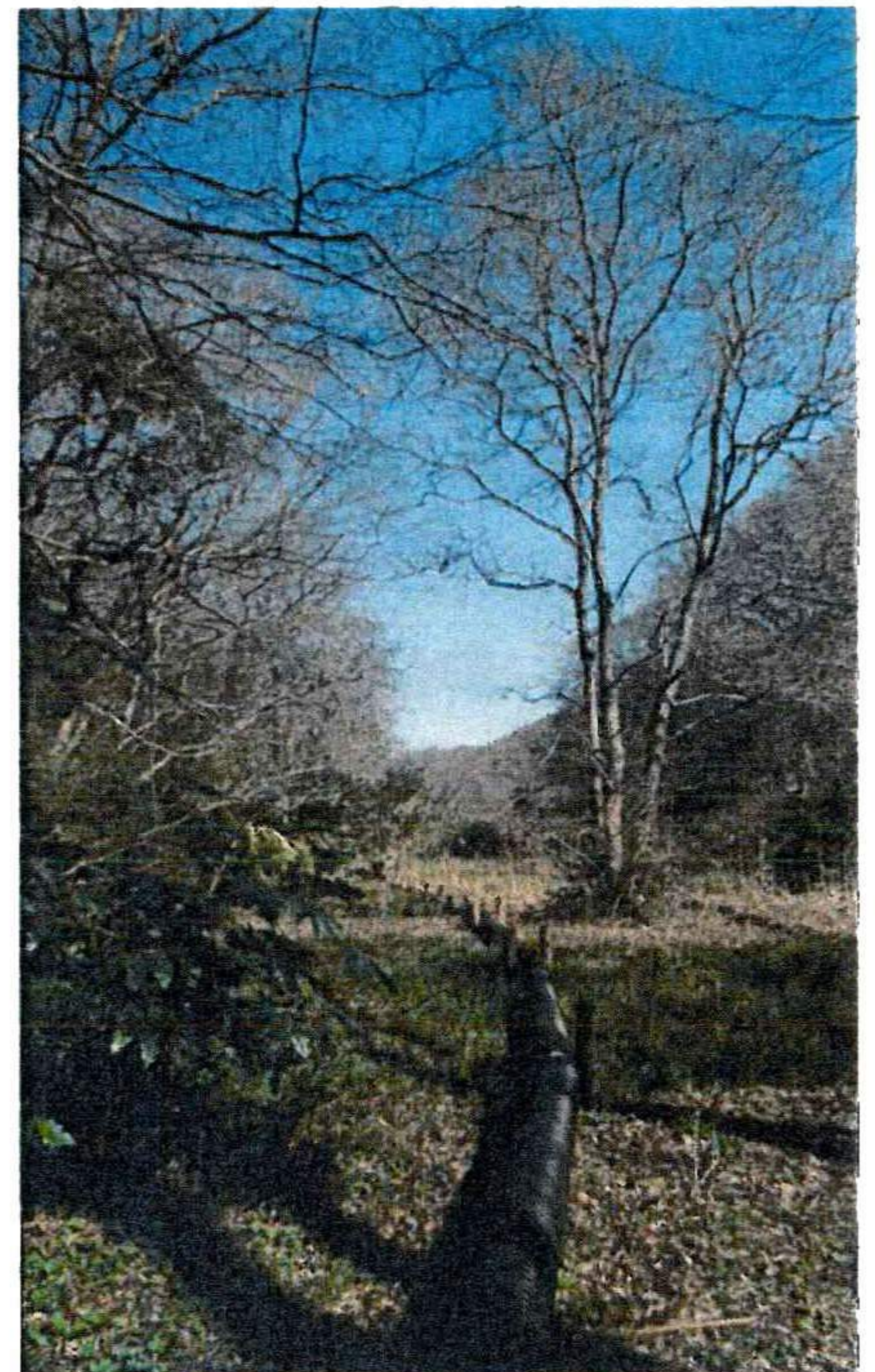
＜市による樹木整理
危険な樹や枝が伐採されています＞



＜環境変化により川に産んでしまったヒキガエルの卵を、
右上写真の専用池に移動＞



＜堤体拡幅に備え、カエル産卵用池は
堤から離して設置＞



＜堤脇から見た「谷戸三郎」と排水用ホース＞

いずれも2、3月撮影